

[発行日]=1999年9月28日

[本文]

不思議なところに来ている。

広場の中央に、黒々とそびえ立つ山賊の見張り台のようなものがあり、それを囲むように七つほどの建物があるのだが、そのなかになんとも異様な、魔女の館(やかた)のようなものがある。

雨の降る夜に、終点から二キロはあろうかという、この広場まで、一人の異国の乗客をバスで送り届けてくれた運転手は、そういえば、アゴの部分が狐(きつね)に似ていたような気がするが……。

このブランズトルプという村は、私がこれから行こうとしているティダホルムまで約二十キロ。目の前に広大なベッテルン湖が広がっている。

学校が始まるまで十日ばかりある。ティダホルムに近い静かな村で、都会で煮つまった頭を、少しほぐしたいと思ってやって来たのだが、この村の一軒しかない宿で、働いているのはポーランドからの出かせぎの人たちで、英語もスウェーデン語も全く通じない。宿の主人は六十半ばのお爺(じい)さんだが、一階が村で唯一のレストランなものだから、私のお粗末なスウェーデン語会話の練習相手をしているヒマはない。

この村で五日が過ぎた。不思議な映像を観(み)ている気がする。小さな村、隅々までこぎれいでゴミひとつない。村人も、そして訪れる人も、ほとんど老人ばかり。広々とした芝生の庭で、ゆっくりと午後のお茶を楽しんでいる。ふりそそぐ光、静かな時間の流れ。百年前と同じ村のたたずまい。

ただ、一步中へ入ると、かつて小学校だった建物には子供たちの姿はない。製材所の機械も、人が来た時に動かして見せるだけ。夏祭りの日にはパン窯も一日中活躍した。近くの村々から、たくさんの着飾った老人たちが集まった。お爺さんたちが幾日もかけて造った舞台での、村の人たちの唄(うた)も演奏も、とても素朴な感じで、私にはおもしろかった。でも、なにか雨雲のように、村を包む、深い断念に似た空気がある。

夏祭りの日の夕暮れに、異形の館に村人たちが集まった。たくさんのろうそくが灯(とも)された堂内に、白いローブの巫女(みこ)が現れ、唄うように何か詩片のようなものを吟(つぶや)く。耐えがたき美の倦怠(けんたい)を、なおかつ生きのびなければと論しているような……。この瞬間をのがしたくないと思ったが、カメラを取り出すことはおろか、そこに自分が居ることすら許されていないような気がして私は怯(おび)えた。村人たちのコラールが始まる。移民前の素朴な歌が次々と流れた。ろうそくの光にからむ、張りつめた声の美しさ！

机の上にチリ紙に包んだ茹(ゆ)で卵のカラ。ベッドの上に流れるミーシャのファド、

あがた森魚（もりお）のエレジー。おそらく、旅の果てにこそ聴かれるべき、このような歌の調べを、何故私は、はるばると、かき抱いて来たのだろうか。

《注》ローブ=長いガウンのような服▽コラール=賛美歌▽ミーシャ=ポルトガルの歌手▽あがた森魚=日本の歌手